

〔DA-5000W EXの開発ストーリー=管球式DACの終焉?〕

オーディオ機器の評価は最終的には”どれだけ心地良い音か?”ということです。
この”心地良さ”に関しては、ひとにより多少好みがあるところですが、「生演奏の生き生きした音が好き」という点で、先代の（オーディオ評論家）加銅鉄平と渡辺の好みは完全に一致していました。（政治の世界でも何かよく聞く言葉ですが…）
ですから、渡辺が頑張って改造したアンプ類は「メーカーの高級機より俄然良い！」と賞賛してくれることがしばしばありました。
こんな経緯で半導体製品の開発は総て渡辺に任されることになりました。
一方、加銅は真空管OTLアンプの作製等で、オーディオ技術誌とのコンタクトを取り続け、自社の宣伝と衰退しかけていた真空管アンプを啓蒙する役を担ってきました。
（真空管オーディオフェアの発起人でもあります）

当時、パワーアンプに関しては管球式のメリットが大きく啓蒙に力を入れたのですが、実は渡辺あるいは加銅にとっては音が良ければ管球式、オール半導体式どちらでも構わなかったです。要は音の良さだけです。
測定器メーカーでもありますけど今でも殆どデータは気にしません！
（実際、ひずみ率はあまり測ったことが無かった。殆ど試聴に時間を費やしてます）

弊社DACはDA-1000から始まり2000、5000と三代目ですが前2機種がオール半導体式であったのに対し、5000では更なるグレードアップを目指し管球式出力を採用しました。当時は半導体式出力より管球式の良さが突出していましたので…。その後、市販品でもI/V変換用ICや抵抗器に良いものを見いだし管球出力式と互角に勝負出来るようになったため大型トランスを採用するなど音的にも力感をアップしたハイエンドモデルを開発しました。それがDA-5000W_EXです。

それでも、このオール半導体式DACの「圧倒的」優位性を図らずも証明出来たのはその後何年も経ち、つい先日2017年秋のことでした。
普段から社内の音出しに使っているDACは、常に最新の部品に入れ換えたり回路を改良したりしてバージョンアップに努めています。
近年開発したオーディオ専用アンプSKA-1やスケルトンの抵抗器の改良版、スケルトンポリプロCで要所をまとめた器械を毎日、「当然の音」として聴いていましたが実はこれがトンでもない音でした！！（壺中の天：天国的音世界とでも言うのでしょうか）

社内モデルと各部全く同じ仕様に管球式の改造を行い今回の真空管オーディオフェアに「管球式ハイエンドモデル」としてFALブースに出展しましたが、参考までに予備で用意していた「社内モデル」と比較すると実に惨めな結果に終わりました！
（特に今回は意気込んで6、7社の真空管を取り寄せベストの銘柄を選んでの結果で、ある意味ショックでもありました）

当然、このイベントでは直ぐに「社内モデル」のみをデモることになりました。
真空管オーディオフェアですから当然、真空管の良さを訴えたく出展したのですが、
逆に実に皮肉な結果に終わってしまったというのが裏事情です。
今回、明らかになったのは「現時点でDACに関しては殆ど管球式のメリットは無い」と
いう事実で、いつか機会があればこの状況を退役した加銅にも伝えたいと思っています。
多分、加銅なら「なる程！」と首を縦に振ってくれるでしょう。

〔結び〕

本DACに限らず、オーディオ機器は各パーツの音の良し悪しが製品の音を決定づけます。
「こんな所は関係無いだろう」という所も試してみると変わる事が多くあります。
弊社はパーツの重要性を30年以上前から認識していて、樹脂塗装等、市販パーツの限界
を悟ってからは自社開発を始めました。(SS-3000超高級プリアンプの開発あたり
からです)
アンプユニットは勿論、肝心の抵抗器、フィルムコンデンサーは総て自社製品が頼りです。
電線自体は自社で作るわけにはいきませんが、綿素材等、適材適所のシースを生み出しまし
た。これらのパーツが総合して弊社が狙う「実にリアルな音」を作り出しています。
弊社は常にこの最新部品を使った最先端の音をご提供するよう努めております。

(製品の各仕様が気になる方は弊社webページをご参照ください)

2017年11月 吉日
(株) 日本オーディオ 渡辺賢次